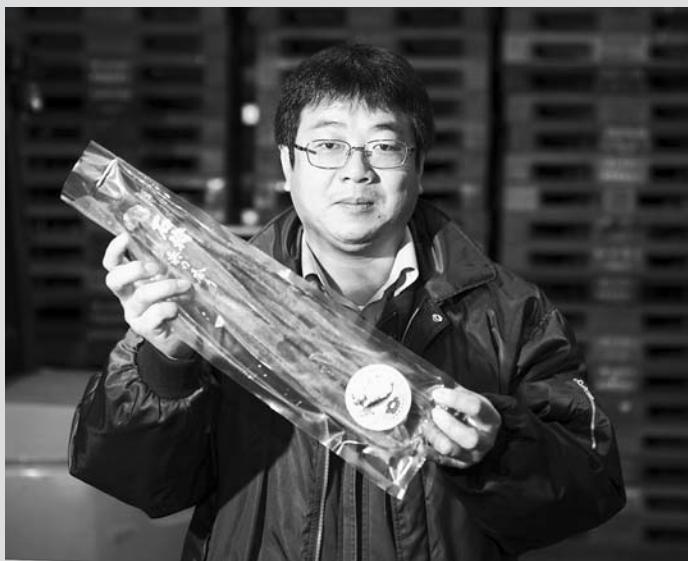


# いしかり産



◆迫力満点だった  
サケ漁の風景。



◆ソフトな食感が人気  
の「いしかりサーモン  
ジャーキー」は、石狩  
湾漁協石狩支所のオ  
リジナル商品です。

昨年（平成21年）秋、石狩観光協会が3回にわたりて「石狩サケ定置網クルージング＆鮭いくら醤油漬け体験教室ツアー」を企画しました。漁船でクルージングし、漁師さんの仕事を間近で見学できるとあって、記者も「こんな体験はめったにできない！」と鼻息荒く、ツアーに同行させてもらいました。

参加したのは秋晴れ広がる10月4日の朝。漁師さんたちを乗せた船と、見学者を乗せた船がともに港を出て、防波堤を越え外海に出ると、それまで穏やかだった海は一変。うねる波の上を、大きく揺れながら船は進んでいきます。やがて「漁場につきました」というアナウンスとともに、漁師さんたちは私たちのすぐ目の前で網を引き揚げ始めました。サケがびっしりとかかった重い網を力強く引き揚げる漁師さんたち。迫力満点のその光景に、記者は仕事を忘れて興奮状態。カメラマンも夢中でシャッターを切りました。それが今回の表紙

## かむほどに旨みが広がる 石狩のサケトバ

です（この様子はえりすいしかしりネットテレビでもチェックできますよ！）。

さて、平成21年の石狩湾漁協石狩支所でのサケの水揚げ量は342トン（12万尾）となりました。ただ、そのうち2.2kg以下のものは規格外となってしまいます。そんな小ぶりのサケはどこへいくのか…と思ったら、同支所では、平成9年からトバに加工し、「いしかりサーモンジャーキー」として販売していました。皮付きのまま3枚におろしたサケを一度乾燥させた後、縦に細かく切って再び乾燥させます。新鮮な石狩産の秋サケを使っているだけに味わいも良く、桜のチップの豊かな香りと、ソフトな食感が美味です。知る人ぞ知る人気の商品をぜひ皆さんもお試しください！

「いしかりサーモンジャーキー」の販売先  
石狩市観光センター「ゆめぼーと」  
☎62-4611 国親船町107

今号24ページに本町地区関連の記事が掲載されていますので、併せてご覧ください。

弁天歴史通りとは「にある「いしかり砂丘の風資料館」には、紅葉山49号遺跡で発掘された夥しい木器類と「鮎」の模型が展示されている。4500年前の先住民の英知に驚かされる。その隣に平成19年移築復元した「旧長野商店」が通りを飾っている。明治の匂いを十分にただよわせ、この歴史通りへの散歩を誘う ◆程なく右手に（まるだい）佐藤水産の魚醤工場の裏手にさしかかる。社長の気遣い厚く、通りに面した黒塀は粋なものである。次に石狩弁天社。石狩川の主と言い伝えられている「妙亀法駿（みょうき）大明神」を祀る市重要文化財である。今も漁師の皆さんに守られ、創建元禄7（1694）年の佇まいは思わず頭を垂れる。（河口灼け鮎弁天は御簾上げよ遠藤寛太郎） ◆イシカリ十三場所の元所運上屋を再現した建物を入り口に擁し、歴史レリーフ、句碑や「鮭供養之碑」等が散建される「弁天歴史公園」。緩やかな砂丘を利用しての舞台広場もあって、赤トンボが壁面を染める秋、「石狩さけまつり」のサケつかみ取りに笑いの人々群れる。公園の一番高いところに「先駆けの玫瑰の芽の真紅」の碑ひとつ。元東京大学総長で俳人の有馬朗人氏の碑である。この句をいただいたことを誇りに感じる市民は多い。秩父事件で知られる井上伝蔵の句碑は市民の手によって建立されたものだ。（佛の眼にちらつくやたま祭り） ◆左脇から海に抜ける小路を行くと「石狩浜海浜植物保護センター」に至る。海浜植物の見本園は幾度かの挑戦を跳ね返し、思いのままを許さない、ハマハタザオ、イソスミレ等、その自由で自然な生き様に少し手を焼いている。それとて季節には僅かばかりの花々を咲かせてくれるのだが、実はそのほうがずっと自然かもしれない。

（市長）

## 石狩散歩 II

◎ 石 狸 隨 想

40

# 黄金山の「源義経伝説」

こがね やま

みなもとのよしつね

平成21年7月、国の名勝に指定された黄金山（アイヌ語名…ピンネタイオルシペ）には、二つの伝説が伝えられています。一つはユーカラの主人公である「ポイヤウンペ伝説」で、もう一つは「源義経伝説」です。「ポイヤウンペ伝説」は「黄金山にポイヤウンペの育つたチャシ（山城）があった」というものです。

もう一つの「源義経伝説」は幕末、浜益に来た探検家の松浦武四郎によつて書き留められていて、「この山は）義経公が住居し給いしと云、そのとき甲冑置かれしが、今化して蝮蛇に成有ると云伝えし」となっています。意味は、「黄金山は昔、源義経が住んでいたことがあり、そのとき鎧兜を置いておいたら、それがママシになつたとされている」です。二つの伝説は、方がアイヌ民族のもので、もう一方は和人のものです。なぜ二つの伝説がここにあるのでしょうか。

源義経は文治5（1189）年に奥州衣川の高館（岩手県）で自刃した源氏の武将で、浜益はおろ

か北海道とも無縁のはずです。しかし、義経伝説は道内各地に伝えられています。なぜ、東北で死んだはずの源義経の伝説が北海道にあるのでしょうか。その理由は、江戸時代、北海道に来た和人が各地で広めたからで、黄金山の伝説もその一つです。

義経の自刃は民衆の間では、「実は生きて、高館から弁慶たちと落ちのびた」と伝わり、江戸時代に入るに「竜飛岬（津軽半島の最北端）から蝦夷地（北海道）に渡った」となります。この形の伝説は本州で17世紀後半ごろに成立し、水戸光圀や新井白石も信じていたといいます。これが、蝦夷地に持ち込まれ、定着します。その時期は、サケや毛皮などを集め、本州に売る場所請負人が本格的に活動し始める17世紀後半から世紀以降のことと考えられます。おそらく請負場所のアイヌ通詞（通訳）などを通して広められたのでしょう。

（石橋孝夫）

が場所請負を始めます。ですから、黄金山の義経伝説はこの時期以降伝えられるようになつたのでしょうか。しかも、内容を見る

と「ポイヤウンペ伝説」を一部借用して創作された形跡があり、当時の和人とアイヌの文化の重なり方を知る上で興味深い例です。



黄金山（撮影は5月）

■文化財課・いしかり砂丘の風資料館

☎62-3711 ☐bunkazaih@city-ishikari.hokkaido.jp

「いしかり博物誌」は、えりすいしかりネットテレビ(<http://www.i-eris.tv/>)でもご覧いただけます。